

参考資料

「将来像」

「年間指導目標」

「将来像」とは…

「将来像」とは、本校の「キャリア教育の視点」です。

本人及び保護者の願いを基に児童生徒の自己実現に向けて、知的障害のある児童生徒に対する、一人一人に応じた、一貫性・系統性のあるキャリア教育の在り方を考えた研究の成果です。

児童生徒が卒業後に過ごす場は、主に「家庭」「職場」「余暇の場」の3か所です。本人及び保護者の願いを基に児童生徒の3つの場における将来像を作成することで、児童生徒の自己実現にむかう取り組みを、一人一人に応じて、一貫性・系統性をもって行うことができると考えています。

【将来像の定義】

将来像は、自己実現をしている生活を想定した、児童生徒の23～25歳時の姿

小学部段階では、働く生活を開始するまでに長い年月があるため、「将来の生活を描き始める時期」と位置付け、将来像の「設定」に焦点を当てます。次に、中学部段階では、小・中・高の12年間の学校生活が後半に入る段階であることを踏まえ、「将来の生活について考えを深めていく時期」と位置付け、将来像の「具体化」をめざして実践を行います。高等部段階では、学校生活からの卒業と働く生活の始まりが近づいている段階であり、「卒業後の生活の在り方を考え、決定していく時期」であることから、将来像の「現実化」をめざした実践を行います。

この将来像の取り組みを軸として、各学部の生活年齢による時期の特徴を押さえ、学部間における系統性のある取り組みを目指しています。

「家庭」「職場」「余暇の場」の3つの場

本校の将来像は、「児童生徒23～25歳時に、自分の力を最大限発揮して、生き生きと生活している様子」を生活の3つの場から考えます。

表1 中学部の将来像の例

子供の将来像		将来像	
		中学部 ○年 氏名 ○○○○	
将来像(自己実現をしている生活を想定した、本人の23～25歳時の姿)			
家庭の場における将来像	職場における将来像	余暇の場に関する将来像	
<ul style="list-style-type: none"> ・買い物や留守番、洗濯を一人で行うことができ、家事の手伝いをしている。 ・簡単な料理をすることができていて、料理をすることやその料理を振舞うことを楽しんでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活面が自立している。 ・人とかかわることが好きで、自分から働きかけ、職場の同僚と友好的な関係を築いている。 ・自分で気づいて行動していて、時間を意識して頼まれた仕事に最後まで取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・優しく友人を気遣うことができている、友人を誘って映画を見に行ったりするなど、人と活動することを楽しんでいる。 ・計画を立てて友人と旅行に行くことがある。 ・スポーツ教室に通っている。 ・マラソン、バスケットボールなどの運動サークルに入って週末に活動している。 	

将来像の成果




将来像や、将来像作成の観点から実践を導いた取組から、4つの成果が得られました。

(1) 一貫性のあるキャリア教育のモデル

将来像の定義や考え方を基に「自分の力を最大限発揮し、生き生きと生活している姿」(自己実現)を見据え、小中高のどの児童生徒にも、一貫して将来像を軸とした取り組みを行うことができます。

各学部の将来像の位置付け、作成の観点を表2に示しました。小学部では「設定」、中学部では「具体化」、高等部では「現実化」という一貫性をもたせ、小中校の12年間を通して、キャリア発達を促すことを目指しています(図1)。

表2 各学部の将来像作成の観点

	将来像の位置付け	将来像作成の観点
小学部	将来像の設定	 ○将来につなげたいよさ
	高等部を卒業し、働く生活を開始するまでに長い年月があることを踏まえ、「将来の生活を描き始める時期」と位置付け、児童が「よさ」を発揮し、活躍した場面を集め、将来像の「設定」を行う。	
中学部	将来像の具体化	 ○行動の基となる能力 ○支援の方法と程度
	小・中・高の12年間の学校生活が後半に入る段階であることを踏まえ、「将来の生活について考えを深めていく時期」と位置付け、将来像の「具体化」をめざして実践を行う。	
高等部	将来像の現実化	○場面 ○かかわり ○実態 ○金銭収支 ○社会状況 
	学校生活からの卒業と働く生活の始まりが近づいている段階であることを踏まえ、「卒業後の生活の在り方を考え、決定していく時期」と位置付け、将来像の「現実化」をめざして実践を行う。	

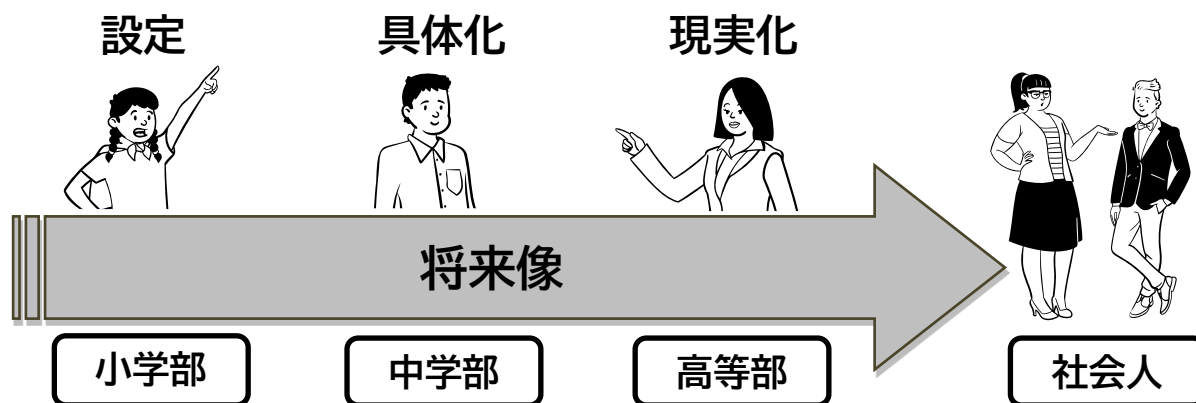


図1 一貫性のあるキャリア教育のモデル

(2) 系統性のあるキャリア教育のモデル

将来像に基づいた実践の結果、将来像作成の観点について、図2のような系統性が見られました。将来像作成の観点は、生活年齢に応じた段階にそって、整理・発展していくと考えています。

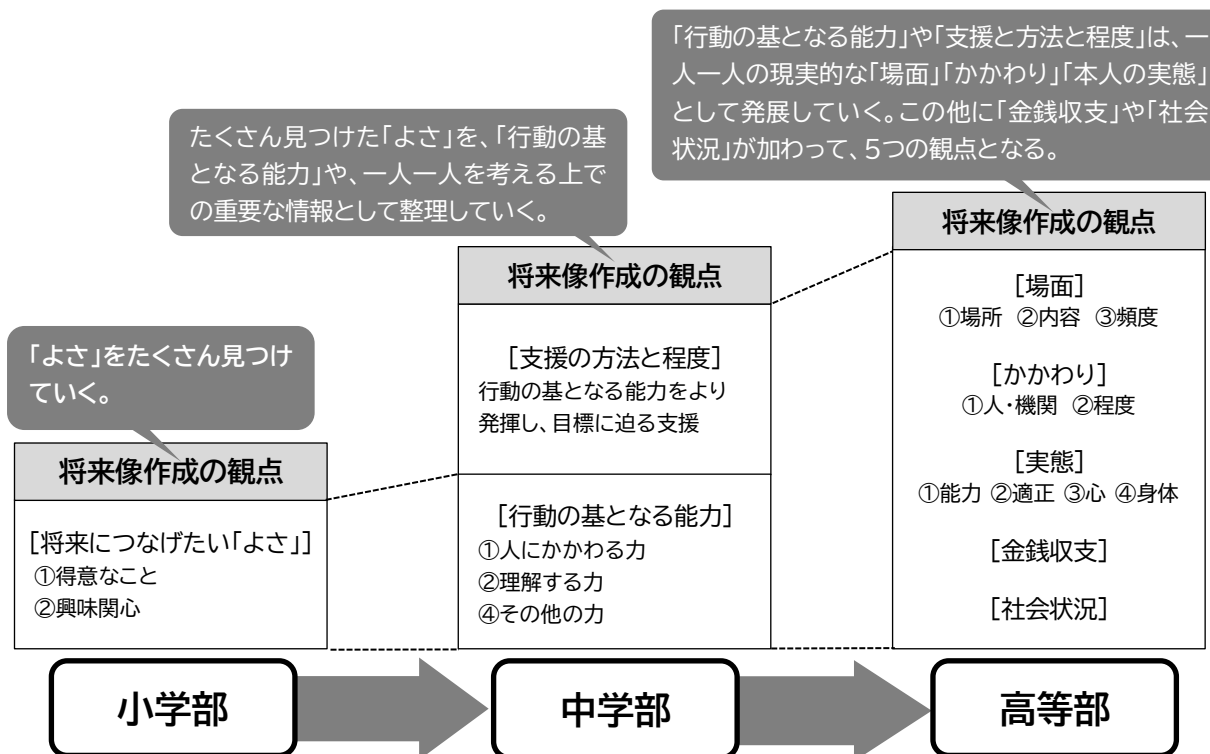


図2 系統性のあるキャリア教育のモデル

(3) 将来像を軸とした共通の視点による共通理解の深まり

将来像を軸にした取り組みの中で、将来を見据えた共通の視点で教員が児童生徒を共通理解し、共通の支援にむかう仕組みを構築することができます(図3)。

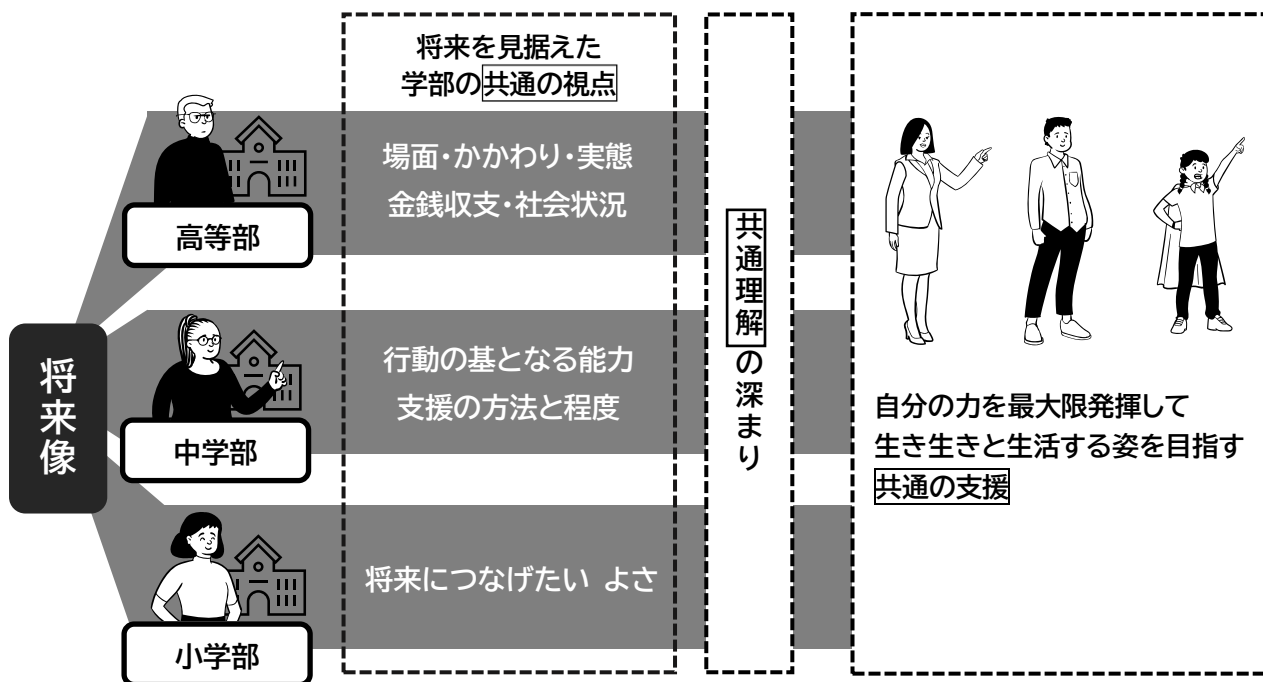


図3 将来像を軸とした共通の視点による共通理解の深まり

(4) 授業における「生き生きとした姿」の重要性の確認

将来像作成の観点からは、各学部の「生き生きとした姿」を目指した実践や、実際の授業における生き生きとした姿から導き出されました。このことから、自己実現に向かうために、今を「生き生き」と過ごすことが将来の「生き生き」へとつながることの大切さを確認することができました（図4）。

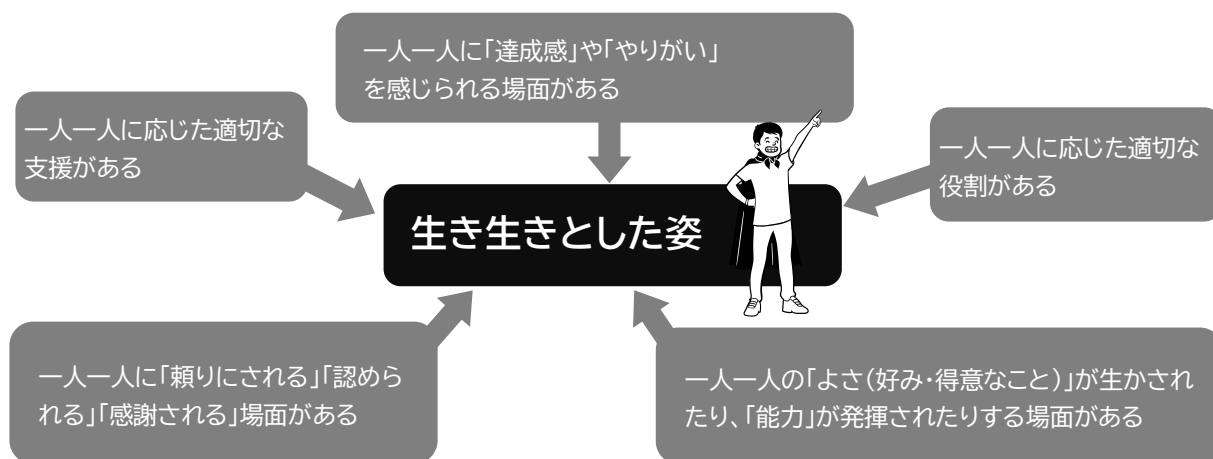


図4 授業における「生き生きとした姿」につながる要素

「年間指導目標」とは…

個々の児童生徒の自立と社会参加を目指した個別の重点目標です。

本校では、個々の児童生徒の自立と社会参加、「将来像」を目指して、個別の支援計画における長期目標を設定しています。その長期目標の達成に向けて、1年間で目指す姿を具体化したものが「年間指導目標」という個別の重点目標です。この「年間指導目標」は、基本的に全ての指導形態で取り組むものであり、それぞれの指導形態において目指す姿を目標として設定してきました。

また、これまでは本校の個別の指導計画では、この「年間指導目標」に基づいた各指導形態における目標を設定、評価を中心に行って来ました。

「年間指導目標」は、個々の児童生徒の発達・成長に寄り添いながら、学校教育目標が掲げる自立と社会参加を目指すための重要な取組です。一方で、本研究を通して、教育課程上の位置付けやその内容についての整理の必要性も明らかになっています。今後、教育課程の見直し・改善の中で、それらの課題の解決を目指しています。

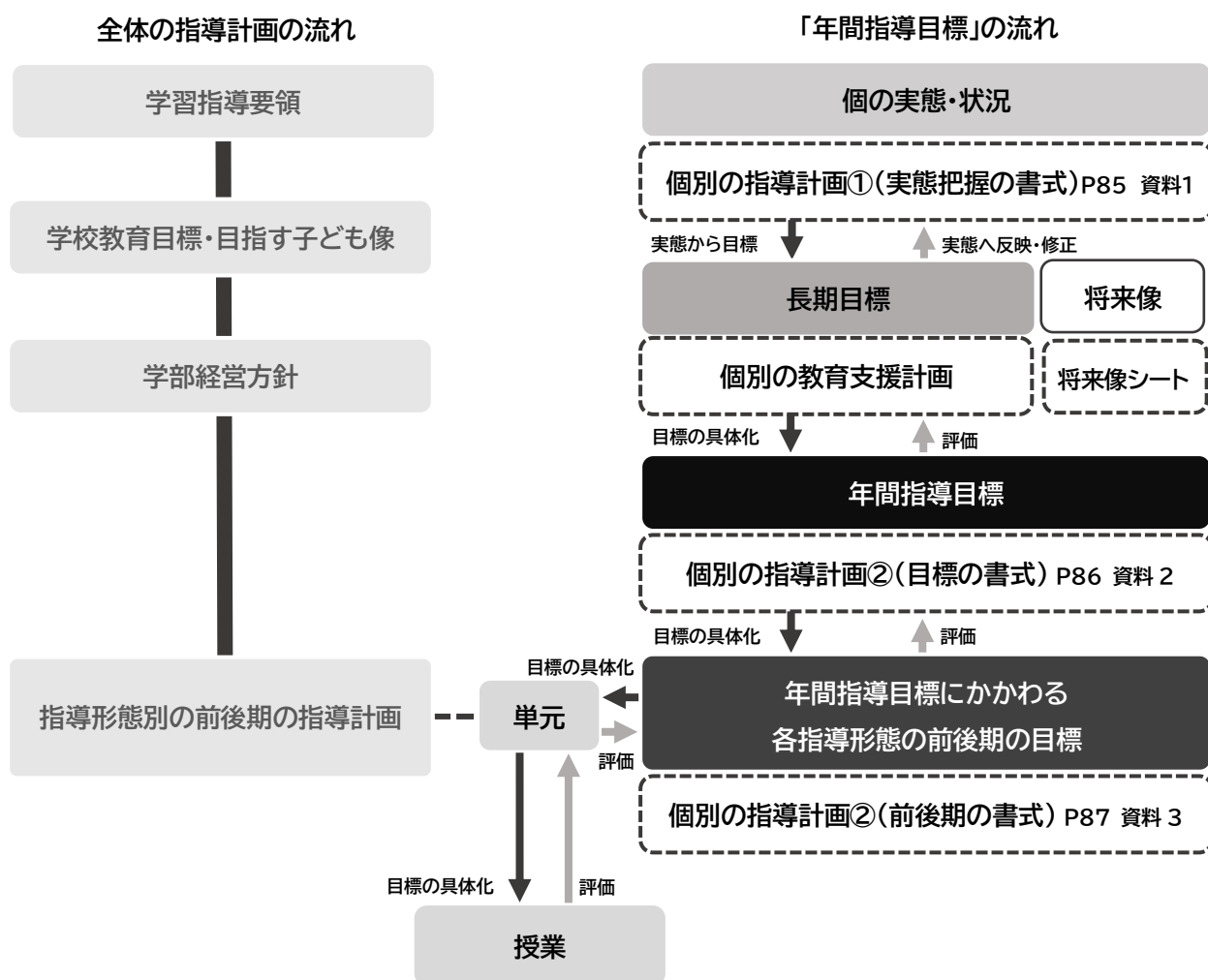


図5 「年間指導目標」にかかわる目標設定・評価の流れ

取り扱い注意

個別の指導計画①

令和〇年度

埼玉大学教育学部附属特別支援学校

中学部〇年 〇〇 〇〇

記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

1 現在の状況

<p>健康の保持 (日常生活面、健康面など)</p>	<p>「着脱」 ・着替える時に「上→上→下→下」というように、すべて脱がないように着替えを進めることができる。</p> <p>「食事」 ・緑の野菜が苦手だが、好きな物を励みに食事をすすめることができる。 ・苦手な食べ物についてもデザートなど食べたいものがあると無理に食べて吐き出してしまうことがあるため食べる前に量を減らす等調整している。</p> <p>「生活動作」 ・着替えている状態で体操着の裾をズボンに入れるため、言葉かけが必要である</p>
<p>心理的な安定 (情緒面、状況の理解など)</p>	<p>・好きな物があるが、10まで数を数えることで切り替えができる。 ・曜日に応じた予定、着替え、食事前後に使用する物など色々な面でこだわりを見せることがあるが、事前に視覚的に伝えたり、繰り返し言葉で確認したりすることで、徐々に受け入れられるようになってきた。</p>
<p>人間関係の形成 (人とのかかわり、集団への参加など)</p>	<p>・好きな大人に自らかかわりを求め、遊びたいことを「やってください」という言葉で伝えることができる。 ・座って学習活動に参加する、という姿勢は身に付いている。教員の話が多くなると自分の手のささくれ等を気にして、周りに意識が向かなくなったり、注目すべき人や物から注意がそれ、好きなものに向かって衝動的に飛び出すことも時折あったりする。</p>
<p>環境の把握 (感覚の活用、認知面、学習面など)</p>	<p>・教員からの言葉かけなどをきっかけにやることを理解し、課題や活動に取り組み始めることができることが多い。 ・終わりがはっきりしている課題は、終わったということを理解して次の課題にうつることができる。 ・提示された課題に取り組むことができるが、途中で手が止まってしまうたり、他のものに気を取られたりしてしまうことがある。</p>
<p>身体の動き (運動・動作、作業面など)</p>	<p>・一本橋や丸田渡では高低差のあるものでも落ちずに渡りきることができる。 ・マラソンなどの意図的に走る活動は、一人だと歩いてしまうことが多いが、教員が並走するとスキップやサイドステップをするような動きで走ることができる。 ・動作模倣は、身体の正中線を超えるものや、指先の動きもまねることができるが、視線が向かないことがあり正確にまねることは難しい。 ・ひも通しや型はめなどの手先を使い集中して取り組むことができ、小さなビーズなどでも上手につまむことができる。</p>
<p>コミュニケーション (意思の伝達、言語の形成など)</p>	<p>・カード等の視覚支援は有効である。しかし、見通しがもてる時もあるが、こだわってしまうこともある。また、自分からカードを使って意思の伝達をしたり、行動を開始したりするといったことはあまりない。 ・「ほしいもの」+「ください」や「行きたい場所」+「いってきます」は、2語文で伝えられることもある。</p>
<p>特記事項 (性格、行動特徴、興味関心など)</p>	<p>・聴覚過敏があり、慣れない音や友だちの泣き声などで耳をふさぐことがある。耳ふさがみられる際には、イヤーマフを使用するかどうかをたずねると自分で選択することができる。 ・衝動的に飛び出す等、行動の調整が難しい部分がある。</p>

自立活動の6区分27項目に着目した実態把握

資料-1 本校の個別の指導計画①書式・実態把握(年間計画)

取り扱い注意

個別の指導計画②

令和〇年度

埼玉大学教育学部附属特別支援学校

中学部〇年 〇〇 〇〇

記入者 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

1 年間指導目標

指導の方針	
①言葉かけのみでの指示理解は難しいが、見本や手本から活動を理解し行動することができ、覚えた活動は自分から取り組むことができるため、与えられた役割・活動に自分から取り組むことができるようにしていきたい。 【配慮事項・手立て】 ・視覚的に見通しをもてる支援（手順書やスケジューリングボード等） ・活動量の調整 ・終わりを明確化 ・やり方や動きを分かりやすくする場の構造化	
②やりたいことがある時に、自分の意思を貫かずに他者からの提案を受け入れることに課題があるが、単語や手を引くことで自分の意思を伝える力があるため、自分の意思や要求を適切な手段で伝えることができるようにしていきたい。 【配慮事項・手立て】 ・活動の順序を明確化 ・報告や気持ちを伝える言葉の提示 ・やりとりする場面の設定 ・適切な言葉を伝えることができたときに称賛	
年間指導目標	
①役割・活動に自分から取り組むことができる。	
②自分の意思や要求を適切な手段で伝えることができる。	

2 後期の指導計画（自立活動）

	指導目標・指導内容	指導場面・手だて	評価
自立活動	・1日の流れに見通しをもち、活動に参加することができる。（心2）	朝の会等 ・ホワイトボードに予定を掲示し、場所や持ち物等普段と違うものがある場合は、口頭での説明を加えて確認をする。	・普段とは違う予定カードが掲示された時は、一度普段通りの予定を掲示してから、予定を入れ替えて正しいものに貼り直したり、使わないカードを片付けたりする一連の流れを自分自身で行うことで、変更を受け入れ、その後は掲示された予定通りの活動に参加することができた。
	・自分の決めたやり方や順番だけでなく、教員からの提案を受け入れて行動することができる。（心2、コ2）	日常生活全般 ・事前に視覚的手掛かりとともに伝える。 ・必要に応じて口頭で今やるべきことや順番を伝える。	・予定や、使う物等に関する訴えを繰り返し行う様子が見られたが、やりたい気持ちを確認したり、その後の予定を順番で示したりすることで納得することができた。

資料-2 本校の個別の指導計画②書式 ・ 年間指導目標、自立活動の書式（後期の例、抜粋）

3 後期の指導計画（指導の形態別）

指導形態	指導目標	学習活動・手だて	評価
日常生活	①自分から家事活動や係活動に取り組むことができる。	家事活動：ごみ捨て 係活動：献立記入、発表 ・やることリストを提示し、カードを手にとって確認しながら活動に取り組めるようにする。	・着替えが終わったら2つの家事活動に順に取り組む流れは理解しており、教室を出る前に教員へ報告してから家事活動に取り組むことができた。
	②職員室の入退室時のあいさつや役割が終了した時の報告等を、適切な言葉で行うことができる。	家事活動 係活動	・教室から家事活動に向かう時は、必ず教員に「ごみ捨てに行ってきます」と報告することができた。
	教科等の評価 ・国語 B 書くこと：手本を見て献立を視写することができた。献立発表時は、教員の言葉を復唱するように読み上げることができた。 ・職業家庭（家庭分野）B 衣食住の生活 ウ衣服の着用と手入れ ：給食準備においてバンダナを机上に置いて結んでからかぶることで、自分で身支度を整えることができた。		
朝会・運動	①設定した目標を時間内で走りきることができる。	マラソン ・目標数分の洗濯バサミを服につけ、終わりが分かるようにする。 ・歩く時間が増えてきた時には必要に応じて教員が並走する。	・周数の目印になるものが無くなるまで走るということは理解しているが、苦手という意識が強く、使用の有無に関係なく、自分のペースで歩くことが多かった。「よーいどん」の言葉かけをしながら並走することで、継続的に走る距離を伸ばすことができた。
	教科等の評価 ・保健体育 A 体づくり運動：準備運動において、教員の言葉かけを受けながら指定された動き通りに概ね取り組むことができた。		

5 年間指導目標に対する評価（後期にのみ記載）

①役割・活動に自分から取り組むことができる。
 毎日行う家事や係活動は積極的に自分から取り組むことができた。校内実習など、同じ活動を繰り返す学習では、教員が示した手本を見てやり方を理解し、その後は自分なりに取り組みやすい方法を工夫しながら継続して行うことができた。

②自分の意思や要求を適切な手段で伝えることができる。
 使いたいものややりたいことなどを名称のみで伝える場面が多く見られたが、適切な言葉の始めの文字を示されると、言い直して表現することができた。活動の終了時など、報告等を一連の流れに組み込まれているものは、自分から適切に伝えることができた。

資料-3 本校の個別の指導計画②書式・指導の形態別の指導計画（後期の例、抜粋）、
 年間指導目標に対する評価